

ザ・パスポート

次回会合

日本赤軍 5.30 声明 P2

「あいつ」のこと 奥平純三 P6

特集 2001年連帯の旅

5. 29 「甦れ赤・P、走れJRAJ 集会報告 KI P7

5. 30 リッダ闘争27周年の日に、ご挨拶 丸岡修 P8

5. 30 リッダ闘争27周年の日に際し 丸岡修 P9

日本赤軍レバノン獄中者一同のアピール P12

5・30集会メッセージ 浴田由紀子 P13

5・14 NOといえる日本を！ガンバレ日本人！集会へのあいさつ 丸岡修 P14

読者へのミニレター 丸岡修 P14

「浴田です。お久しぶりです」?? P15

叛逆のRED PEPPER Vol.3 ワッタン P18

レバノン派遣報告 No.4 Hsi P19

THE PASSPORT

1999.6.12 No. 83

5/29 新宿歌舞伎町ロフトプラスワンにて参加100名以上（店側発表）



5. 30 声明

戦争政策に反対し、平和と環境立国の日本へ進路を変えよう！

1999年5月30日 日本赤軍

日本の人民、友人、同志のみなさん

5月30日のリッダ闘争27周年を迎える、日本赤軍全同志の名に於いて、連帯と闘いの挨拶を送ります。

私たち日本赤軍は、反戦平和を求めた日本の闘いを通して生まれ、闘いを開始し、武装闘争を通して70年代を闘い、現在に至る国際主義と連帯の隊伍を育ててきました。21世紀を迎える今日、戦争の渦巻く現時代を、反戦と平和の時代として21世紀へ引き継ぐ為に、更に闘い続けます。

1、戦争と戦争政策の拡大の中で新たな統治、管理のシステム化がグローバルに進行しています。

21世紀に向かう世界の様相は、軍事支配を軸とする外交政策として展開されています。ユーゴ空爆、イラク空爆、朝鮮半島の緊張と、世界は今、アメリカを中心とする軍事力による外交が主流を成しています。

「人道に関する犯罪の制裁」を声高に主張するアメリカをはじめとするNATOの爆撃が、果たしてユーゴ政権より人道主義的だと誰が言い切ることが出来るのでしょうか。ミロシェヴィッチ政権がチトー後、セルビア人の権益拡大によって、民族問題の解決を誤ったことが、ユーゴ連邦解体に導いたことは事実です。しかし、ユーゴへの常軌を逸した執拗な空爆は、89年の東欧社会主义の崩壊後も唯一この地域で生き延びている社会党政権の破壊に基本目的があります。

クリントン政権は、ソ連東欧体制の崩壊後の21世紀を貫く政治理念として「市場民主主義」の国際秩序の形成を掲げ、「十字軍」を送り込み、世界を軍事力によって自らの描く世界に無理矢理作り替えています。その原理主義的な態度は、世界を無秩序へと益々落とし込めていました。

アメリカ政府の掲げる「市場民主主義」とは、資本主義のグローバル支配を目論み、第一に代議制民主主義・多党制による選挙で選ばれた政府である事、第二に、市場経済の実行、第三に、世界システムに自ら統合している事を意味しています。これらは、ソ連型の社会主义、一党独裁、計画経済、社会主义体制を再び地球上に存在させないと宣言として、グローバル資本主義の政治理念としてうちたてられたものです。

東欧ソ連の社会主义体制の崩壊後から、帝国主義勢力は、21世紀に向けて社会主义的要素を一掃しよう

としており、ユーゴは欧洲で唯一生き残った社会主义政権の性格を持つが故に、世界システムに自らを統合しようとしない、つまり主権をグローバル基準にゆずらないが故に、非妥協の攻撃に曝されています。

グローバル資本主義の掲げる「市場民主主義」は、果たして人々に幸せを享受する資格を与えているでしょうか？

グローバル資本主義の統治体制を特徴づける第一は、世界の制度的均一化にあります。資本の自由を保証する制度的均一化は、国内の歴史的発展の度合いによってでは無く、他国の大資本の自由を保証する「合理的」方法として作られ、辺境に至るまでの国際基準として、各国の発展を無理矢理統合して行きます。一国内のグローバル勢力の育成は、経済から検察に至るグローバルスタンダード形成に向けて各層毎の連携を拡大しながら世界統治に組み込む、トランシガバナンスシステムや会議体が実体的に機能し、会計基準から、反麻薬、反「テロ」の基準の世界化を促進しています。それらは、革命解放勢力への弾圧のみならず、各国の社会的システムの崩壊と市民的自由の制限として機能する危険性を持っています。

アメリカンスタンダードを基準とするグローバルスタンダードは、大量消費型のアメリカ資本主義を世界大に拡大し、それに反対する要素を「非合法」として摘み取ろうとするアメリカ政府の目論見としてあります。

第二の特徴は、超国家機関の役割の増大によって、各国の主権の制限を押し進める事にあります。WTO・IMF・世銀・G7サミット・バーゼル委員会・ダボス会議・国連などなど。これらは、グローバル資本主義諸国（帝国主義諸国）の間の矛盾の調整の場であると共に、強大国が弱小国を支配する国際機関として制度や基準を作り、各国を統制する役割を増大させています。

超国家機関による強制は、国家間の分極化を進め、一方に霸権的国家が形成され、他方に従属的国家群が形成され、さらに国家が丸ごと超独占に買収されるような新植民地的国家群が形成される事態を生み出します。霸権国家は国家権力を使ってグローバル資本の利潤追求を貫徹しようとし、他方の国家群では、霸権的国家や国際機関の政策の実行を強いられる構造として進行しています。

第三の特徴は、国民経済の自己完結性の崩壊を作り

だしてゐる事です。グローバル資本主義支配は、国民経済の位置も変化させ、国家の役割もグローバル資本の展開に相応した変化を強いられています。日本も又、例外ではありません。

こうした資本の自由への国家の隸属は、人民に犠牲を強い、人間的・社会的関係を破壊し、地球環境を破壊し、国家内でも世界的な規模でも二極化を推し進め、貧困と飢餓と地域戦争・核戦争の危機を再生産するものです。

第四の特徴は、人間社会における人々の生き方のドラスチックな変更を強制する事です。

グローバリズムは、人々を益々押金主義思想へと落とし込み、消費主義と競争、個人主義を基調として、それが普遍的な価値として市場至上主義の下で貫徹され、諸階層、民族、人と人との関係を分裂させ、疎外を拡大させています。グローバル資本主義の支配強化は、国内の歴史や伝統の自然成長的な要素を外的な資本主義生産関係に置き換える分、統合が進めば進むほど、各国、各民族、各地域相互の文化的・思想的価値観の対立を深めざるを得ません。

それは一層の世界の混迷を結果としていたざるをえません。

しかし、一方で、「市場民主主義」はグローバル資本主義を推進する政治的理念としてありながら、それは同時に人がグローバル資本主義を否定する武器として闘う契機ともなっています。

NATOの空爆に象徴される軍事的支配に対しては、主権を防衛し平和と反戦の闘いが広がる条件をつくり出しています。また、グローバル資本が「市場民主主義」の価値観を振りかざせばかざすほど程、人々はその非人間性、反民主主義の姿が浮かび上がり、企業に対する公正・透明性と民主主義を求めていくでしょう。政治においても、参加と自治、自決を求める民主主義の要求が「市場民主主義」の支配に対抗する条件を世界大に形成しています。

市場を基本とする民主主義では無く、人間を基本とし、自然と共生する民主主義へと、民主主義を巡る攻防が激化しています。

それは又、20世紀に人間の英知がうちたてた人民主権を求める民主主義の姿を、21世紀の平和を実現し、自然と共存する、人間主義の民主主義として引き継がれようとしています。

私たちの求める社会は、自然も人間も資本に従属させる資本主義モデルではありません。人々の環境と暮らしを第一とし、人々が対等、平等を分かち合う社会です。その理想は遠くにあるのではなく、現実の生き方の中から一歩一歩共に闘い、闘いを変革しつつ進む中で作られます。

求められるのは、その理念を現実に活かそうとする人々の政治的・社会的参加の拡大であり、参加の拡大の中から自治と自決を育て、共に今を変え、相互支援し、参加民主主義によって育ちます。

20世紀の中で育まれ、人民の参加によって戦い取られた民主主義の意志を継承し、国家間関係の民主化、企業の民主化、社会の民主化をより大胆に押し進めていこうではありませんか。環境や社会の様々な暮らしの中から生まれる人民の知恵と力の統一を武器に、共通の運命に有る各国人民の戦いと連帯しながらが進むことが今ほど求められている時代はありません。

21世紀を、暮らしや環境に調和した共生社会へと結実させる為、人民参加の民主主義の徹底として、民主主義を巡る攻防に勝ち抜こうではありませんか。

2、小淵政権の戦争政策を、平和、護憲の日本の進路にとって変えよう。

日本は、今、危険な戦争政策に突き込んでいます。日米安保新ガイドラインの道は、アメリカの世界軍事支配と従属的同盟を形成し、対朝鮮、対中国に対する実戦稼働条件を作り上げ、戦争への道を踏み出す国の進路の選択を意味しています。国際攻防から見ると、日本がきわめて明確に戦争シフトへと踏みだしたことが解ります。

衆院で周辺有事関連法案が採択されたが、この法案はかつての「国家総動員法」にも擬せられる法案であり、防衛ガイドラインに沿って、非軍事施設・民間施設を米軍の要請を受けて自由に活用しうる戦時体制の法律として準備されています。いわゆる「不審船」追跡事件で、危機感をあおり、自衛隊艦が出動し、日本海の領海をはるかに離れた公海上で、勝手に設定した「防空識別圏」の極限で、銃撃や爆弾を投下したという既成事実をもとに、自衛隊が実戦活動しうるという規定を明記しています。

小淵政権は「テボドン」の打ち上げ以来、朝鮮半島の危機、「北朝鮮の脅威」をマスコミを総動員してあおって来ました。「テボドン」打ち上げに対して、その情報の内容も確認しないまま、国会において全会一致で朝鮮民主主義人民共和国の非難決議が成立する事態は、戦前の時代を思わせます。こうした政治状況が戦争に向かう時代を醸成しています。

自民党が自由党との連立に踏切り、公明党をまじえて一挙に右傾化が進みつつあり、NATOに照應した域外活動を含むアジアの軍事同盟の姿が作られつつあります。

日本は、20世紀の前半を戦争と侵略の時代として過ごしました。それは又、父や母の世代が貧困と苦闘、諦めと服従を強いられた時代としてありました。

敗戦を経て、新しい運命を切り開きながら戦争に反対する人民の力量の中で平和が育ち、護憲が常識となり、20世紀の後半を物質的豊かさの実現として社会を建設してきました。

平和憲法で生きてきた日本が、戦争への道を再び進んでおり、今後「有事法案」も国会に上程され、組織暴力対策法、住民基本台帳法などに典型的に示されるように「便利」の名によって、国家管理が強化され、市民的自由や人権が侵され、いつでも戦争可能な状態へと国民全体を導いています。

人民の平和を求める意思は多数でありながら、政党政治には反映されているとは言えません。

日本の進路は、経済的には、世界市場の形成と一体化してグローバルに進行する基準の統一、行革・規制緩和として進行しています。金融危機が経済回復の足を引っ張り、景気後退が続き、銀行への公的資金が導入される一方で、規制緩和は金融ビッグバン、持ち株会社解禁、労働規制緩和として進行し、「経済戦略会議」報告に示されているように日本経済はグローバル標準にそった経済へと再編されつつあります。日本市場は米国金融資本を受け入れ始め、資本もソニーのようにグローバル資本化する企業と、出来ない企業とに分岐し始めています。国家は、資本の生き残りをかけた世界の競争に動員され、犠牲は益々暮らしにのしかかっています。

こうした国の進路を巡る経済構造の大きな転換は、金融独占や戦争準備に公的資金が無尽蔵につぎ込まれる一方で、福祉、教育、保健、年金などの公的支出はあらゆる名目で削減されています。

従来の価値観や社会的諸関係が崩壊するなかで教育問題、医療などの社会的問題が一層深刻化しています。

失業の増大は、戦後最高となり、とくに中高年にとつては深刻な問題となっています。人間関係の崩壊が進み、中高年層自殺の増大や教育問題の深刻化、青少年層の犯罪の増加・凶悪化が進んでいます。人口の高齢化問題も介護保険の導入、年金改革と、社会の中で、役割を果たしてきた人々への福祉支援体制のあり方が問われています。これらの動向は、資本の要請に国家の役割を変更していく帝国主義諸国家のほとんどどの国で見られる、人民へのしわよせ、社会的弱者の切り捨てや犠牲を強いいる状態と共通しています。

日本の進路が全方位外交では無く、アメリカとのパートナーとして進む限り、戦争政策、不況、そしてアジア、世界に対する抑圧民族としての役割を負わざるを得ません。

日本は、ポスト冷戦の流動と再編の過渡期にあるこの時代だからこそ、ファシズムの反省としてうちたて

られた憲法9条を基礎とした国の進路を堅持し、平和と環境を大切にして世界に貢献する国としての役割を果たすことによって、経済の道筋をアジアとの共生として創り出す好機の筈です。アメリカを含むどの国とも同盟を結ばず、友好平和条約で結び合うことが出来ない理由はどこにもありません。ただ、アメリカと利害を分かち合う集団と、目先の利害に非政治的に集まる経済的集団によって日本は誤った進路に導かれようとしています。

再び日本を戦争あるいは戦争加担の道に導いては決してなりません。戦争政策に反対し、平和を実現する一歩を下からの人民の社会参加から作り上げ、国の進路を変えようではありませんか。

3、民主主義の徹底を通して国際主義を実現しよう。

日本の人民、友人、同志のみなさん。

リッダ闘争から27年、国際遊撃戦を必要とした戦争状態から、パレスチナアラブの闘いの様相も既に違った闘いを要求しています。

5月17日、リクード右派政権、ネタニヤフは、グローバル資本、シオニズム、アメリカ政府の後押しを受けた労働党バラク党首に破れ、再び、暗殺されたラビンの路線へとイスラエルの流れが変わろうとしています。その流れは又、アラブ、パレスチナに「土地と平和の交換」を基本とする「和平プロセス」として進む条件を創り出して居ます。「和平プロセス」は同時に又、中東マーシャルプランを含むグローバル資本主義への統合と再編として、イスラエルを要とする中東支配のプログラムと同時に進行しようとしています。

中東に於ける公正で包括的な和平は、既存の「和平プロセス」のみならず、パレスチナ建国、帰還の権利を求める人民の要求を実現する事が不可欠となります。それは又、新しい植民地支配に抗した人民の権利を求める闘いとして、国際的な反グローバル支配の闘いと結びつきながら進むでしょう。

21世紀に向かって、人間の英知は、一方に人民主権の民主主義を、他方に市場至上主義の民主主義の攻防を創り出しています。

20世紀の人民解放の思想であるマルクス主義は、人民主権を求める民主主義へと引き継がれ、各地でグローバル支配に抗した民主主義として闘い抜いています。

社会主義が求めたものは、人民自身が主権者として、搾取と抑圧の無い平等、対等な人類社会の実現にありました。その要求は今も、より切実にグローバル支配の前で明らかになっています。技術革新と情報革命は地球に地理的、時間的落差を無くし、支配も被支

配も攻防の同時性と同質性を帯びながら進んでいます。産業革命の連続性と人民搾取で利潤を求める資本主義のパラダイムを踏襲した生産力主義の「社会主義」は、人民の主権を求める民主主義に敗退し、新しい社会主義のパラダイムが求められています。

効率性と、技術信仰は、地球環境を破壊し、公害による生態系の危機をもたらし人々の生活様式の変更を余儀なくさせ、類的な危機を20世紀に自覚させました。ヒューマニズムに根ざさないものは、なにものも世界を救う事が出来ません。人間主義の哲学に基づいて社会を再構成する闘いが徐々に芽生えています。それは又、根底的にグローバリズムの支配と対峙せざるをえません。

国家は、公正を、民族は平等を、人民は民主主義を求め、グローバル支配に重層的に対応する闘いを通して、新しいパラダイムによる国際秩序をうつたてていく闘いが始まっています。人民の側の闘いは、圧倒的な資本の側の情報や宣伝の前で、小さく、分散した状態でありますながら、しかし多様に、確実に人民の根っこのことろで闘いを継続しています。

かつて日本に於いて、社会正義と反戦平和を求めた闘いや、労働者の権利を求めた闘いが、高度成長の「豊かさ」を越えた新しい幸せを実現できなかつたし、連合赤軍事件のような、希望を摘み取ってしまう味方の誤りがありました。かつて私たちも、「民主主義」をブルジョア民主主義の制度的側面だけを見て否定し、反帝社会主義を掲げて闘いながら、一方で、人民の意思と力を軽視した闘い方が在りました。その結果、有効な闘いへと人々が共に共感を持って進めない事態を作り、それが日本の闘いに否定的な流れを作っていたことはいなめません。

そうした中で引き続き闘い続けた多くの人々、友人たちが在り、一人よがりの運動は退き、人々に根を下ろした運動が今も、日本の社会的正義を実現する基盤として生き生きと闘っている事を知っています。

こうした生活と持ち場に於ける民主主義の徹底を求め、自治、自決を求める、人々の参加民主主義の拡大は、足元の闘いでありますながら、グローバル支配によって、共通の運命を分かちあつている分、世界の人民の闘いを支えています。

こうした人々の意思と力を広げ、民主主義の徹底を通して戦争政策に向かう日本の進路を正し、平和立国であり、環境立国として、日本が世界に呼びかける日を作り上げようではありませんか。

そのことは、安保を不要とし、N A T O に至るアメリカの軍事支配を掘り崩し、違った世界の道筋を切り開くでしょう。

私たちも又、微力を尽くして、反グローバル資本主義の戦線を担い、国内の民主主義の徹底を求める闘い

に呼応しつつ、21世紀の価値として人間主義に基づく民主主義を掲げて闘い抜きます。

4、私たち日本赤軍は、グローバル支配に抗し、民主主義の徹底の一翼で闘います。

リッダ闘争、国際主義の連帯を実現したこの日、私たちは再び連帯を求め、闘い抜く意思を表明し、新たな結び合いを目指します。

レバノンの獄中で闘っている同志たちも又、制約された条件で闘いを続けています。高村外相が99年1月、中東諸国を歴訪した中で、レバノンに拘留中の5人の同志の身柄引渡しを再び要求しました。そして、中東和平の一環として、レバノン問題に関する日本提案として「レバノン四原則」提案を同時に提起し財政支援の方向を明確にしました。これまでの経済援助と違って、アメリカとの合意のもとで仲介の当事者として登場をめざしています。日本政府のレバノンへのこうした積極的な入れ込みは、同志5人と切りはなしては考えられず、強制送還に向けた動き、他の同志への逮捕攻撃と一体のものとしてあります。ハリリ政権に代わって登場したレバノン新内閣は、「5人の送還問題は、司法の問題で行政問題では無い。」として送還の要求には合意しませんでした。

こうした新内閣の態度は、一貫して岡本同志ら5人の日本赤軍獄中同志を支えるレバノン、アラブ人民勢力の努力の結果としてあります。

アラブ人民勢力は引き続いて送還阻止、政治亡命要求を掲げて積極的に闘い続けています。高村外相は、「日本国内では犯罪者でしかない日本赤軍らへの一部のレバノン人の支援は残念だ。」と記者会見で語り、経済援助と引換えに、日本赤軍支援を止めさせようと画策しました。

アラブの地に於いては、リッダ闘争以来、人民の中で共に闘い抜いて来た日本赤軍に対する政治的認知の歴史的地位はあります。

私たちは、引き続きレバノン、アラブ、世界の抑圧された人民の友として、支援し、支援されながら、共通の目的を実現する為に闘い続けるでしょう。

そしてまた、その闘いが日本の闘いと連動した民主主義の徹底として結実するよう闘い続けます。

獄中で闘い抜いている親愛な同志たち。

分からずく結ばれた同志たちの意思を、闘いを通して21世紀へと発展させる様、力を尽くして闘います。日本赤軍は、リッダ闘争の歴史的遺産を、新しい時代の闘いの出発点としてヒューマニズムに基づく民主主義の徹底を高く掲げて進むことを誓います。

投稿 「あいつ」のこと

奥平純三

また今年も“カラン!!”という音でも聞こえて来そうなくらいに晴れ上がった青空とチリチリと肌を焼く痛いほどの陽射しに、たった今出てきた木陰にすぐ逆戻りしたくなるそんな季節になりました。街には、信じられないくらい甘いカラズ(桜ん坊)を台車に山積みにした物売りたちの声が響きわたっています。それは、私(達)にとって特別な意味のある日—5月30日(リッダ闘争記念日)を迎える季節の到来でもあります。

それにしても随分と時間がたってしまいました。27年というと、あの作戦で逝った同志達が生きたのよりも長い時間が、既に流れ去ってしまった事になるわけですが、彼等の姿は今も変わることなく、私の中で色彩やかに生き続けています。とりわけ「あいつ」(私の兄なのですが)のことは、一緒に過ごした時間が長い分だけ、この季節に限らずいつも事ある毎に、まるでまだつい何年か前のことのように親しげに意識の表面に浮かび上がります。そういうとき、「あいつ」は生きていた頃に久しぶりに会う度にそうしたように、私の方をのぞき込むよう見て薄く笑いながら“どうしてるんや?”と問いかけて来るみたいでもあり、また黙ってただこちらをじっと見つめてきているだけのようでもあります。そんな風ですから、私の方では今も「あいつ」と一緒に生きている様に感じています。そんな「あいつ」のことを今日は一つ書いてみようと思います。

あれは、「あいつ」がパレスチナに行く話がもう決まり、その準備もほぼ終わって、一緒に住んでいた下宿で最後の整理をしていたときのことだったと思います。私の方は珍しいことに机に座って本を読んでいたか何かしていた筈です。何か書かれた紙切れが机の上におかれ、「あいつ」が目で読んで見ると促していました。目を落とすと、其処には漢詩のようなものが、「あいつ」の筆跡で書かれていました。

一人郷閑を去って天涯に向かう

生別 また兼ぬ死別の時
弟妹知らず阿兄の志
懇懃袖を引きて帰期を問う

意味としては、
“一人で故郷の村を出て、遠く天のはてへと旅立ちます。”

生きての別れは、そのまま死の別れに繋がるやも知れません。

幼い弟や妹は、兄さんの志を知らないものですから、

そっと袖を引いては、何時帰ってくるのかと聞くのでした。”

といったところでしょう。「あいつ」の説明によると、幕末期の無名の志士が書き残したもので、「詩としては、韻も何も踏んでいない拙いものだけれど、気に入っている」と言います。

「な、感じ解かるやろ? ちっちゃいのが足やら袖やらにまとわりついては“ニーチャン、何時帰って来るんか?”って繰り返し聞くんや、な」とも言い、その光景が目に浮かぶようで、私たちは声を合わせて笑いました。

今その時のことを思い出しながら、私は「阿兄の志を知らなかつた弟」というのは、私自身のことだったのでないかという気がしてなりません。そして、この詩を作ったのは「あいつ」自身ではなかつたのかと思つてゐるのです。



2001年連帯の旅

5. 29 「甦れ赤・P、走れJRA」集会報告 報告 KI

〈はじめに〉

久しぶりの新宿、ましてやネオン瞬く夜景と雜踏の中で完全に方向音痴となり、“交番”に飛び込み「ユマ劇場？」と聞いたら、若い警官（息子ぐらいの年齢）曰く「おじさん、気をつけな！！声を掛けられてもしゃべらないこと。後ろポケットに物を入れないこと。携帯電話器も前にさげること…」田舎のオッサンに見られたのかと我が姿を自問自答しながら「ロフト」に向かう過度の花屋のお兄さんに再度、「ロフト」への道順を聞くと、「オジサン、ライブやる？」と冷やかされ、「ロフト・プラス・ワン」であることを教えられた次第。

道行く人は皆、携帯電話で忙しそうに話し合っている中、「ロフト・プラス・ワン」の地下2階会場に入る。

〈会場で〉

さて会場は若者で熱気ムンムン。座る椅子さえ見つけるのがひと苦労。勿論、立ち見あり。中には会場に入れず入り口で買える人もいたほどだ。こんな中で前夜祭をプロデュースする松田さんの挨拶をして若松監督作品の上映が始まる。

PFLPの闘争とその記録は生活を共にしての撮影だけあって、画面から十分に読み取ることが出来る。バックミュージック「インターナショナル」はそれを更に価値あるものとしている。さて人類世界の中で権力者に虐げられている者、虐げられた者が立ち向かうとき。組織化され、十分な訓練の中でこそ闘えることを教えてくれた。

今日の日本はどうであろうか。以前にも書いたことがあるが、総資本・総労働の対決、三井三池単行の大争議の頃、盛んに歌われた「がんばろう、つきあげる空に……」そして

「聞け万国の労働者……」「ああインターナショナル我らがもの……」60年安保闘争時、毎日毎晩、国会周辺・銀座・新橋（土橋）と繰り広げられたデモ、道路いっぱいに手をつなぎフランス式デモ、国会正門でなくなったデモ隊の一人故権美智子さん事件を契機に若者たちに血気がよみがえり、老若男女がこの抵抗闘争に参加したのだ。

最近の我が国は国民の無力感を背景に権力者側の一方的施策が強行され、組対法・盜聴法・ガイドライン・国民総背番号制・破防法改正そしてリストラと称し国民に犠牲を押し付け、防衛庁の水増し事件、銀行に税金投入、長銀・日債銀（天下り先）の破綻等、どれをとっても責任さえとらないのである。

これ程、国民を無視しても国民は怒らないのか。闘う政党がなくなり、闘う労働組合が御用に変わり、それでも中流意識を辞任している構団はパートタイマーという低賃金政策の中、雇用条件をますます悪化させている。このような環境の中で今何が必要なのだろうか。

弱者を守る組織を創り、抵抗組織に育て上げなければ政治を変えることは出来ないであろう。そのために我々一人一人が現状況分析と自己批判をし、運動を能動的に進め、党派性（セクト）を排除しながら共通できる事案を一つづつ実行していくことではなかろうか。

来年3月にはレバノン組にも新しい展開があるであろうし、世界各地からかつての戦士たちが強制送還されてきた時、国内での受け入れはどうなるのだろうか。地についた現状認識を再認して早急に立ちあがもう！！

画面に流れる「ああインターナショナル、我らがもの」と、とつとつと語る重信女史が私の心から離れない。

“2001年連帯の旅” ★ 「ベイルートの5人」国際救援集会

—5. 30 リッダ闘争27周年の日に、ご挨拶—

1999. 5. 30 丸岡修 (集会読み上げ用のアピール)

皆様、こんにちは！

お忙しい中をお集まりいただき、ありがとうございます。

残念ながら、レバノンの救援代表団の来日が延期になりましたが、引き続き支援をお願いします。

5. 30 (ゴーサンマル) ではいつも同じことを述べているので、今回は別のことを述べることにします。私には来年がない可能性がありますし。いや、病死するということではなく、裁判に決定的に負けてしまうとそうなるという意味です。

しかし、2時間という集会のため「できるだけ短いメッセージで」と言われており、とてもかないません。

従って、挨拶としては短くしておきますので、皆さん、文章コピーの方をどうかお読み願います。そこに書くのは、①5人に対する判決が意味したもの、②パレスチナ解放運動が国際革命運動に果たした役割と位置、③日本赤軍と国際革命運動、④リッダ闘争に対する疑問に答える・その2、など。

という次第で、以下に簡単な挨拶を。と言いつつ、長かったりして……。

“A HORIYEH L KOZO OKAMOTO WA RIFAAQ-HU!”

これは、現地アラビア語新聞の見出します。日本語に訳すと、「コーヴー・オカモトと彼の同志たちに自由を！」

リッダ闘争から27年を経た今も、この戦いがアラブの人々の心の中に生きていることを改めてかみしめます。闘争があった翌日の朝、ベイルートで最も外国人でにぎわうハムラ通りの本屋で英字新聞を買おうとしたら、オヤジに日本人かと聞かれ「そうだ」と答えました。すると日本人に対する賛辞が返ってきました。タクシーに乗れば、運転手も同様の態度でした。忘れ得ない光景です。

「連帯は、ローマの市民と剣闘士の関係であってはならない」

ゲバラが遺したこの言葉の意味の深さがわかります。血と汗と涙で結びあつたプロレタリア国際主義を体現した共同武装闘争としてありました。この作戦を契機にシオニスト・イスラエルに対するパレスチナ解放運動の戦いの発展がありました。また、この戦いは、イスラエル情報部モサドによる爆弾テロによって姪と共に暗殺された、PFLP幹部であり作家でもあったガッサン・カナファーニ氏の言葉「武装闘争は最良のプロパガンダである」そのものでもありました（これはドキュメンタリー映画「赤軍—PFLP世界戦争宣言」の中でも語られている）。

もっとも、私たち日本赤軍はこの闘争に浮かれてしまい軍事至上主義に陥り、その誤りを総括して77年の5.30声明「團結をめざし、團結を求め、團結を武器としよう」に到ります。まあ、この話は置いておきます。

97年、5同志がレバノンの法廷で裁かれるようになりましたが、これはレバノンの司法当局がリッダ闘争を否定したことには全くなりません。むしろ逆に、肯定しました。これは裁判の中で明言されています。

判決は、

- ①5人に政治亡命の資格があることを認めた上で、
- ②その資格があるにも関わらず、非合法に出入国、滞在した事が違法であったとし、
- ③「敵イスラエルに対する英雄的行動のコーヴー・オカモトを評価する」とリッダ闘争の意義を認めただけでなく、その前の文で、
- ④「日本赤軍被告たちの政治的信条を評価した」としており、
- ⑤日本赤軍の活動の政治的意義については、「弁護人が述べた」、

としています。

判決に関する日本でのマスコミ報道と、実際の判決内容とはその中身の趣旨が大きく異なるのです。10年前であれば、このような裁判にかけられること自体が起こり得ませんでした

した。まあ、現在のような後退局面もあります。階級闘争の歴史には、進歩があれば反動が、反動あれば進歩があります。ソ連東欧の自滅以降は、米国を中心とした世界帝国主義の一元的支配によって帝国主義に反対する世界中の人民の闘い、革命勢力の闘いが後退を余儀なくされており、その結果として、レバノンにおける5同志の被拘束はあります。

現在の国際情勢下では、この判決は日本や米国の圧力に対するギリギリのレバノン側の抵抗であると言えます。つまり、この裁判は現実的には私たち日本赤軍の敗北ですが、政治的には日本赤軍の政治的立場を公的に評価したという意味で私たちの勝利でもあるのです。日本赤軍の政治的立場、国際主義の行動が裁かれたのではありません。

しかしながら、現実的にはレバノン政府が

5同志を日本側に引き渡さざるを得ない状況に追い込まれる可能性は低くはありません。リビヤ政府が今年、米英の圧力で自国民すらをオランダに開設される英國の出張法廷に出さざるを得なくなったように。

アラブ人民の支えだけでなく、日本人民の応援も必要とします。ウナディコムを始めとする皆さんのが頑張りに期待します。また、私たち日本赤軍も皆さんの支えに甘んじず、私たち自身が今までのあり方を改めていかなければなりません。

国際救援、共に頑張りましょう！

最後に、改めてリッダ闘争の巻き添えになつた一般旅行者の犠牲者の方々にも深い哀悼の意を表します。

以上

“2001年連帯の旅” ★ 「ベイルートの5人」 国際救援集会

—5. 30 リッダ闘争 27周年の日に際し—

1999. 5. 30 日本赤軍 丸岡修 (集会資料用のアピール)

「ベイルートの5人」国際救援集会ということで、簡単に日本赤軍(以下JRA)とパレスチナ革命の関係について述べておきます。きちんと展開しようと思ってはいたのですが、書く時間がなくなってしまいました。別の機会に『ザ・パスポート』にでも書きます。

1. 5人に対する判決が意味するもの

これとは別のメッセージで述べたように、97年7月の判決は日本のマスコミ報道と実際の判決内容とが相當に異なります。日本のマスコミは「国際テロと決別した判決」「政治犯として扱わない」と報じましたが、実際の判決はそうではありません。

結果は「禁固3年」の有罪でしたが、それはあくまで「不法出入国、不法滞在」に対してのみであり、JRAの政治的立場などは評価しました。「有罪」という名で日本政府の顔を立て、政治的評価という実でJRAの顔を立てたものであり、それはレバノン政府が現在置かれている状況、すなわち日本や米国からの政治的経済的圧力を受けながらも他方で「アラブの大義」からJRA弾圧は避けたい状況をそのまま反映したもので

した。

(1) 「政治犯」認定はしている！

あらかじめ断っておきますが、日本共産党が弾圧を受けていた時代に「一般刑事犯」と区別して特権的地位を求めての「政治犯」規定ではなく、つまり「刑事犯」差別の立場からではなく、米国などの帝国主義陣営が革命組織や民族解放勢力を「テロリスト」と罵ることへの反証として「政治犯」という語を私は使用しています。

今回の判決文の中に「5人を政治犯と認めない」とは一言もありません。本審が始まる前の5月、「不法出入国、不法滞在」の罪で起訴するか否かを決定する予審の控訴審において、高等裁判所は5人が「政治犯である」という認定をしました。本審はその前提の下に開かれています。毎日新聞が書いた「裁判長は政治犯として扱わない」は全くの捏造記事でした。

(2) 政治亡命の資格があったことは認めている！

判決の中に「政治的なものとは言えない」とあるのを、日本のマスコミは「JRAの政治性を認めなかった」と報道しましたが、これは判決文を読まずに特派員が通訳から部分的に聞いただけ

類推して記事を書いたからであり、実際の判決はJRAの政治性を認めています。判決文中の「政治的なものとは言えない」という表現は、あくまで起訴されている罪状（偽造旅券使用、偽造ビザ等による不法滞在）に対してのみ為されたものです。

その理由として裁判所があげたのは、「民事における防衛のための緊急避難は刑法237条に規定されているが十分ではない。同様に被告たちはレバノンに政治亡命を求めることが可能だったのである。そうであれば、偽造パスポートをレバノン入国に必要でなく、滞在する場合でも必要ではないはずだった」なのです。

つまり、政治亡命を求められたのにそれをせず、不法に入国滞在したから罪になるとしているのです。判決はそれ自体で、5人が政治亡命の資格を持っていたことを認めているのです。

そして、この部分の前段で次のように述べています。

「……（被告たちの）政治的信条を評価した。また敵イスラエルに対する英雄的行為を行なったコーネー・オカモトを評価した。このことは彼の弁護人が弁論で述べている」

つまり、裁判所は、「（JRA被告たちの）政治的信条を評価する」とリッダ闘争とともに肯定的にみたのです。「政治的意義は弁護人が述べた」と言及しており、JRAの政治性は認めています。

日本のマスコミ報道とは全く違います。

（上記判決文は判決全文を完全和訳した文書からの引用）

2. パレスチナ解放運動が国際革命運動に果たした役割と位置

パレスチナ解放運動がパレスチナ人自身による武装闘争として始まってから30年以上になります。戦後世界の民族解放運動や革命運動を大きく発展させたのは言うまでもなく、60年代のベトナム革命戦争でした。75年南ベトナムからアメリカ帝国主義を放逐し完全解放を成し遂げた頃が、世界の革命運動、民族解放運動の勢いがピークに差しかかった時機でした。パレスチナの武装闘争には、49年の中国革命勝利以降のアジア、アフリカにおける民族独立、社会主义革命の前進が背景としてありました。

共産党が中心になって解放運動が展開されたベトナムなどと違って、パレスチナ解放運動はアラブ民族主義が中心になって始まりました。パレス

チナ共産党などが当時のソ連、東欧の路線の影響で47年の国連パレスチナ分割案の容認、イスラエル建国の黙認という方向にあったため、パレスチナの完全解放、アラブ・ユダヤによる民主国家建設、イスラエル建国の否定というアラブ民族主義運動がパレスチナ解放運動の中心になりました。

ベトナムが民族解放運動であると同時に国際共産主義運動と連関した革命であったのと比べれば、パレスチナのそれは国際共産主義運動よりもアラブ民族主義に軸を置いたものでした。それが故に、ソ連、中国などの社会主义諸国との国家レベルの関係よりも自然発生的に世界各地の民族解放運動との関係の方が強いものとしてありました。もちろん、「アラブの大義」の運動でありアラブ諸国の全面的支持を受けられる条件も整っていました。PLO（パレスチナ解放機構）左派で社会主义革命を目指すPFLP（パレスチナ解放人民戦線）自体も、パレスチナ共産党の系列ではなく、その名も「アラブ民族主義運動（ANM）」という組織から発展したものであり、エジプトの故ナセル大統領や旧イエメン人民民主共和国（南イエメン）の政権与党も同じANM系でした。（後に社会主义諸国も共産党も姿勢を改めた）

帝国主義に反対する闘いは、基本的に三つの世界に分類されます（旧ブントの三ブロック階級闘争論とは別）。旧ソ連、旧東欧、中国、ベトナム、朝鮮、キューバなどの社会主义諸国によるもの、第三世界民族解放運動、帝国主義本国内の労働者人民によるもの（国内少数民族含む）の三つです。ベトナム革命は社会主义国としての闘いでもあったのですが、パレスチナ革命はアラブ諸国の支援はあったものの充分ではなく、ベトナム以上に自力の闘いを強いられました。その分、世界各地の民族解放運動や革命組織との人民レベルの共同が進展しました。相互に支援する関係を発展させることになりました。念のために書いておきますが、「ベトナムは人民レベルの共同がなかった。パレスチナは国家レベルの社会主义諸国支援がなかった」ということではなく、比重を述べています。ランタンアメリカやアフリカの運動、北アイルランドやバスクなどのヨーロッパ内少数民族の運動、JRAのような帝国主義本国内の運動との結びつきが広がりました。モスクワが各国共産党・労働党のメッカとすれば、ペイルート（ナセル時代はカイロ）がもう一方のメッカでした。

た。

JRAも中東で多くの革命運動、民族解放運動と出会うことになります。私と一緒に訓練を受けていた人が数年後には、革命を成功させ某国の大臣になってたり、アフリカの戦場で戦死していました。日本国内においては考えられない国際連帯の世界が存在していました。

帝国主義に反対して闘う勢力としては、旧ソ連共産党を中心とした国際共産主義運動（資本主義諸国、第三世界の共産党などを含む）、中国派系のそれ、第4インター（トロツキー主義者）のそれ、旧ユーゴスラヴィアやキューバなどの非同盟諸国会議の勢力（参加国には親米派もありそれらを除く）、そして国際革命運動の勢力がありました。最も国際革命運動と言っても全党派ではないし各國主体にも相違はあります。この最後の勢力の核にパレスチナ解放運動の位置がありました。もちろん、上記各勢力の関係も築かれていました。

基本的に各国の革命運動は一国単位です。それが反米帝で共同を開始したのはパレスチナ解放運動が大きな要因としてあります。72年のリッダ闘争、すなわちPFLP-JRAの共同武装闘争がインパクトを与え、一気にヨーロッパの革命組織との共同も拡大しました。それまでヨーロッパ人の来訪は、ボランティア支援としてなされるのが基本でしたが、反帝武装闘争共同を求める勢力も来訪するようになりました。スペイン内戦参加の国際義勇軍が主に第三インター・ナショナルの産物なら、JRA-PFLPの共同武装闘争はベトナム革命時代の国際革命運動の産物でした。

3. 日本赤軍と国際革命運動

リッダ闘争を初めとするJRAの闘いに対して、当時の赤軍派の一部（T氏のグループなど）や東アジア反日武装戦線の一部を含めた左翼潮流にあった批判は、「日本革命からの戦線離脱」などでした。好意的な旧赤軍派の一部（前述T氏）でも「国際義勇軍として行動せよ」という考え方でした。「日本革命からの戦線離脱」というのは新左翼潮流に多くみられた見方でした。しかし、その見方は完全な誤解によるものです。

現実的に権力奪取（革命）は世界同時的には起こらず、一国単位で為されます。しかし、日本革命が一国的に発展するということはありません。資本主義の側からも、一国と世界の関係は不可

分になっています。日本の学生運動や反戦市民運動の発展一つとってもそうです。60年代のこれらの運動が飛躍的に発展したのは、米国の侵略に対して断固として闘い続けるベトナム人民の姿があればこそでした。日本のベトナム反戦運動が実際に日米軍基地の機能を完全にマヒさせるだけの力はないとしても、ベトナム人民への支援にはなっていました。つまり、日本人民とベトナム人民は、方法や内容が違っていても相互に相手側の闘いを支え合う関係になっていました。私たちはこれを、「前線=後方」と表現しています。

すなわち、パレスチナ革命の後方が日本での闘いであると同時に、日本革命の後方がパレスチナの闘いなのです。

71年、PFLPの幹部が日本を訪問しました。当時の赤軍派国内指導部（森恒夫氏ら）は「先進国革命主体論」の立場にあつたために、自分たちがいかにパレスチナ革命を支えるかの視点がなく、日本革命にパレスチナ革命を従属させる態度でした。70年のヨド号ハイジャックによる朝鮮民主主義人民共和国行きも然り（これは森氏の前の指導部時代）。当時の赤軍派は、「国際党派闘争」で毛沢東やキムイルソンを論破して「世界党一世界赤軍一世界革命戦線を構築する」と唱えていました。従って、社会主义諸国や第三世界の革命運動を日本革命の後方とのみとらえており、国際根拠地論も赤軍派にとっての根拠地でした。

日本赤軍もその国際根拠地論を論拠にし、赤軍派の国際部アラブ委員会として出発しました。しかし、キューバや朝鮮など国家としてある社会主义国ではなく、また「国際党派闘争」のためになく、革命や民族解放の途上にある勢力との国際共同を目指し、相互支援の関係を築くものと位置づけ直しました。

従って、JRAの展開は、あくまで日本革命主体（赤軍派を見限り、より広い勢力としての革命主体）の「国際部」と自ら位置づけたものとしてありました。「日本革命から戦線離脱」したのではなく、日本革命を世界革命の一環として実現すべく、「日本革命のため」に国際分野での展開を重点的に行いました。

その後、「やがて登場するであろう日本革命の主体」を待つのではなく、JRA自身が積極的にその主体を創り上げていく路線に転換しています。

⇒ここまで書いて時間切れ。JRAが国際革命

運動でどのような位置を占めているのか、米国CIAの重要ターゲットになっている根拠は何か(今回の5人拘束のそれでもある)などを書く予定でしたが、この文が多分載るであろう『ザ・パスポート』84号に続きを書いておきます。(編集係註、今号83号にアピールを掲載したので、次号に続きを書かれることと思います)皆さん、『ザ・パスポート』をよろしく!

4. リッダ闘争への疑問に答える

話の特集社刊の『日本赤軍20年の軌跡』に掲載されている私の文章の補足するものとして書く予定でしたが、時間切れのため、別の機会にします。一点だけ書いておきます。

闘争当時も今も、「プロレタリア国際主義の勝利」「国際連帯の証し」ととらえる人々がいる一方で、一般旅行客にも死傷者が出たことから疑問を持っている人々も少なくはありません。

私たち及びパレスチナ側にとっての様々なやむをえない事情はあります(本に書いたような)、イスラエル警備隊の応戦による犠牲者が多数であると言え、現実に一般旅行者やおそらくシオニズムに批判的なユダヤ人も巻き添え犠牲になった以上、犠牲の人々には深く謝罪します。

日本赤軍として正式な表明は行い得ていませんが、JRAの者として私がここにおいても表明しておきます。(丸岡・浴田・吉村の「三人声明」としては、97年2月、98年2月に表明しています)

5. さいごに一言

風薫る5月、硝煙臭う新ガイドライン国会、野蛮で理不尽なNATOの無差別爆弾が降るユーゴ。21世紀は世界中で平和で風さわやかな5月を迎えられるようにしましょう! 共に頑張りましょう!

日本赤軍レバノン獄中者一同のアピール

拝啓 まず初めに、皆様がたの我々に対するご支援に感謝の意を表したいと思います。

我々にとって祝福すべき日がやってきました。今年は27周年であり、同時に獄中3周年です。今年はこの3年間で最もうれしい祝賀になるでしょう。なぜならば、被占領地である南部レバノンのアルヌーン村の解放を勇敢に勝ち取ったレバノンの青年諸君と一緒に、この祝賀を行うことになるからです。

27年前、3人の日本人青年がイスラエルに占領されたパレスチナの地へ、イスラエルの占領軍と戦うために出かけました。彼らはリッダ空港で最後の一発を撃ち尽くすまで戦ったのです。彼らは自己犠牲と国際主義に信念を抱いた若い革命家たちでした。

21世紀は来年から始まります。我々は新しい世纪への希望を切り拓かなくてはなりません。自己犠牲と国際主義としてリッダ闘争の戦士たちが指し示してくれた人間愛の尊さと共に立脚し、人民と民族の主権を尊重し、そして人民の中での国際連帯を創っていくならば、我々は新たな希望の世界を発展させることが出来るで

しょう。

20世紀の教訓と闘争の新たな世代から学び、民主主義の為に闘わなくてはなりません。社会生活のあらゆる分野における人民の主権を確立し、その主権のいかなる破壊に対しても闘い、政治的に国際連帯を発展させるだけでなく、社会経済的にも同様に国際連帯を発展させていかなくてはなりません。

リッダ闘争27周年、そして今世紀の最後の年を記念し、我々日本赤軍レバノン獄中者はあなたがたと共に、新たな時代の闘いへ参加する意志をここに表明したいと思います。我々はこの闘いに合流するため、レバノンで即時釈放と政治亡命実現、そして我々の身柄の強制的引渡し阻止に向け闘いを続けます。

最後に、新たな世紀を切り拓くため、健康で意気揚揚と世代を越え団結していきましょう。

21世紀に向け前進を!

敬具

1999年5月30日

5・30集会メッセージ

99. 5. 30 深田由紀子

ウナディコム！ 5・30集会に参加して下さった全ての皆さんに、心から連帯の挨拶を送ります。

1972年、5月30日、岡本・奥平・安田という3人の日本の若者が、パレスチナ・アラブの人々の、民族の解放と生存をかけた闘いに連帯し、自らリッダ闘争に参加してから、すでに4半世紀がたちました。彼らが切り開いた、国境を越えて連帯し、共同する民族開放・帝国主義・シオニズム打倒の闘いは、今、あらたな局面の中で、息長く、幅広く、全ての人々の共生を実現する闘いとしてひきつがれ、闘い続けられています。

リッダ闘争で捕らえられ、イスラエルの獄中で想像を絶する拷問と過酷な処遇を生き抜いた岡本同志は、1985年、パレスチナの人々による獄中兵士奪還交渉によって「戦争捕虜」として釈放・解放されました。

にもかかわらず、リッダ闘争によって切り開かれた人民自身によるアラブ・パレスチナ人民との連帯・共同に一貫して敵対してきた日本政府は、その岡本同志にさえ、「国際指名手配」にするという暴挙を行い、再び彼が自由に生きることを妨げ続けました。そして今、彼と彼の仲間達をレバノンの獄に追いつめて、その身柄を、いくばくかの経済援助（という名の利権侵略）のみかえりとして要求し続けています。そうして、すでにイスラエルでの刑を「終了」した岡本同志を再びリッダ闘争によって死刑を含む極重刑攻撃によってなきものにしようとしています。

レバノンの地では、若者達を中心に多くの人々が「岡本を守れ」という闘いに立ち上がってくれていると聞きました。彼らが「岡本を守れ！」ということは、岡本が実践し、実現した、アラブ・パレスチナと日本の人民自身による熱い連帯と友誼・共生、そして、それをはばむ帝国主義・シオニズムへの共同の闘いそのものを守ることに他なりません。今、日本政府の強制送還、死刑重刑攻撃の企みを許すことは、そうしたアラブの人々の友誼と、信頼にそむくこと、リッダ闘争以来築いてきた

人民レベルの連帯を0に戻すことにはなりません。

リッダ闘争は、1つの時代状況の中で、国境を越えて、人民レベルの共闘によって、共通の闘いに立ち向かうという、国際主義民族解放運動に新しい時代を切り開くものとしてありました。多くの不十分さを持ちながらも、闘争が切り開いた人民連帯の実践を、私達は、リッダに関わった全ての人々（戦士達と死傷したペルトリコ人旅行者）を生かしうるものとして、守り育て続けたいと思います。レバノンと日本の人々の力を合わせることによって今、レバノンの獄にとらわれている5人の同志達の強制送還を阻止し、彼らの釈放と政治亡命を実現することが、今、その第1歩の闘いとなるでしょう。21世紀の人民連帯へ、固い絆を！

以下の写真は、5/30、代々木八幡区民会館での模様



★5・14 NOといえる日本を！ガンバレ日本人！集会 へのあいさつ

1999. 5. 14 日本赤軍 丸岡修

【筆者註】これは、塩見孝也氏らの自主日本の会及び新右翼の一水会の両者主催による集会へのメッセージを要請されて書いたものです。私は一水会に対しては友好的でもなく敵対的でもなくの中間的立場です。尚、新左翼の多くは塩見さんたちの一水会との共同に批判的です。私は塩見さんたちが原則さえ見失わなければ、別に構わないと思っています。

(丸岡)

【編集係註】個人的に、こんなメッセージは紹介したくないという気持ちを抑えきれない。また、文中の「共同できる点があればその点は共同すればいいという立場」は、敵に利用されるだけじゃないのかと危惧している。しかし、思想や意見に許せない点がある人にも、こちらの主張を伝えていきたいという丸岡さんの気持ちはわからないわけではないので、掲載することにした。

(K)

集会の基本主旨には全面支持できない立場の相違が私にはあります。しかし、少数民族の主権を含めた民族主権の確立を左右の立場を越えて目指すという意味においては、評価します。

従って、基本スローガンは同意できない点を含むものの条件付で賛同します。

私が基本的に賛同しつつも条件付きとする点は、「左右の垣根を取り払う真民族派による左右合作を」とある点です。右翼であるというだけで問答無用と排除する立場を私はとりません。だが、全面合作ではなく、共同できる点があればその点は共同すればいいという立場です。

全く同意できない点は、石原慎太郎都知事に対する態度です。彼の言う「横田基地の撤去」は彼の専売特許ではなく、以前から日本共産党や旧社会党なども言っていたことであり、この点をもって石原を支持することはできません。中国を「支那」と呼んではばからない態度に代表される彼の立場は、民族主義でも悪い方の民族主義です。石原のそれは、「大和」至上の排他的霸権的なそれであり、彼の「反米」も日本の独占資本の保護からのものであり、帝国主義諸国間の矛盾の一つでしかない、と私は考えています。

読者へのミニレター

★リッダ闘争27周年！

今日は！皆さん、お元気ですか？私の体調は良好です。微熱がようやくなくなり、歎心発作も少なく軽くなり、1日に2、3回。

1. 前号82号の西川同志に関する記述に少しまちがいがあります。裁判報告とは無関係ですが、すみません。

① 誤植／彼の誕生日について、私は8月8日か4日かと書いたのですが、4日が4月になってしましました。8月は西川同志、山本同志、佐々木同志、松田

以上に述べた点を除けば、反米・反グローバリズム、民族主権を確立するという点において、本集会の主旨に賛同します。

私たち日本赤軍は80年以降、民族自主、経済自立、国防自衛を新日本の立場とし、外交は非同盟の反帝国主義という立場です。皆さんの「対米従属のグローバリズムと闘い、自主、自立、自衛、共存、共栄、共和の自主日本を！自主、民主、平和の日本を！」というスローガンに全く異議はありません。

全面賛同ではなく申し訳ありませんが、皆さんの試みが発展拡大することを強く望んでいます。頑張って下さい。

ついでながら、以下を叫んで終わりとします。

NATOは空爆というユーゴスラヴィア侵略を直ちに無条件で停止し、平和的にユーゴ政府と話し合え！ユーゴの国家主権を侵すな！日本政府は対米追従外交を直ちにやめ、NATOの野蛮な侵略行為を非難せよ！ユーゴ政府も旧社会主義共和国連邦時代の理念に戻り、民族問題を正しく解決せよ！

共に頑張りましょう。

以上

99. 5. 30 丸岡修

同志と4人も居て（もちろん氏名が警察に割れている者のみの人数）、十数年も同志たちに会っていないと、ええと、ええと……。

② 私の間違い／「完全音感」と書きましたが、友人から間違いと指摘がありました。「絶対音感」でした。ちなみにその友人は「ゼロ音感」とのことですが、ならば私はマイナス音感か……。

2. 83号に書くと大言したことは、84号以降に……。

「浴田です。お久しぶりです」??

1999年6月2日 浴田由紀子

お元気ですか。

5.30がすぎて、またあつい夏が来ます。獄中にいると、梅雨のないアラブのこの季節がむしょになつかしいです。今頃は市場の屋台は、幾種類もの果物でにぎわっていることでしょう。ルミエの同志達や山本同志も、あの太陽を思いっきりすい込んだようなカサス(サクランボ)やムシムシ(オウタンキョウ)や、バッティハ(スイカ)を食べているかしら。

国会は新ガイドライン法案を通して、「戦争をする国づくり」に本格的にのり出しました。組織的犯罪対策法案・労働者派遣法案・日の丸君が代法制化等、次々に、敗戦後日本国憲法の下でこの国の人々が築いてきた平和・人権の尊重・働く者の権利や民主主義等等が今、いっきに葬り去られようとしています。「政治的無関心」の意図的な釀成によって、立法院と市民をひきはなすことが、この間の反動勢力にオセオセを可能にしているようです。

「高所大局」を語って、足元の生活と人間関係がないがしろにして来た過去の在り方をとらい返しつつ、生活の場から、民主主義を一つ一つ実践し、共に今を変えていく闘いを再度、根性入れてとりくみましょう。私は今、私達はもっと「生活権」「共有権」ということと、「日本国憲法」を勉強した方がいいな、と考えています。

で、日々は、大道寺将司同志証人尋問まったくなか、の裁判に完全にはまっています。

この間裁判は、被告人の直接質問を含む弁護側尋問として進んでいます。74~75年の東アジア反日武装戦線・反日思想の形成過程から、各闘争の根拠や当時の各グループの実体、1回1回の連絡会議の内容に至るまで、第1次統一公判がなしえなかつた「事実審理」を含めて私達はていねいな掘り起こし、裁判の中での共同の事実検証、総括深化を進めています。

5月10日の公判では、内田弁護士による東アジア反日武装戦線の形成過程、反日思想、さらに東アジア反日武装戦線の一連の闘争が提起した戦争責任、侵略責任の問題、天皇制などに

ついての現在に至る状況に関する質問のあと、私自身も直接質問を行いました。まさに、「この日のために、全ではあった」と言いたい!

「最高級の取り組み! 最大の見せ場!」になるはずでした……が、まず、「次回あなたも担当」と言われた瞬間から、「こんなはずではなかった」事態が次々と進展することになる。「将司君に会えたら~」とあれだけいっぱいあつたはずの聞きたかったこと、言いたかったこと、伝えるべきこと……の全てが、スッポンとぬけて、何ひとつ言葉にはならないのです(「ポケーンと生きてるからじゃ」という声が聞こえそうです)。

早くレジュメを作って渡さないと、準備に困るだろうと思うのに、気持ばっかりあせて……。

そうして、準備未了、頭ゴチャゴチャのままその日を迎えることになってしましました。当日のために私が用意した質問事項は、反日思想について、組織形態について、何故武装闘争だったのか、ダッカ闘争と超法規的釈放を今どう考えているのか、というものです。

内容的には、内田先生と重複しますが、直接対話の中で話題にしたいということです。さらに前日の夜には、この一世一代の歴史的対話の時をよりステキで感動的なものにするために、第1声としての「気のきいたひとこと」をも、フトンの中で考えました。

ところが、内田先生の質問は、長びかせてほしいという私の願いもむなしく、早めに終わってしまい、私は、いきなり最前線に立たされ、「次は被告人ドード」。……スックと立ち上がって、「気のきいたひとこと」を……。カンドー的なステキな言葉が……で・て・こ・な・い!

昨日の夜、フトンの中で、ピカッとひらめいたあのひとことは何だったのだ、いったいどこへ消えたのだ……。(ドワスレというのでしょうか。元々変だったのでしょうか、

……メモを取らなかつたのはあまりの自己過信です……。) エーイ、仕方がない! 「浴田です。お久しぶりです!」(証人同志はキヨトンとしてる! アタリマエヤ、何の話や……、カンドーのカケラもない。超ダサイ!) 世紀の直接尋問は、こうして開始されました。

質問はシドロモドロ、どこまでが意見で、どこまでが質問か、聞く人も、しゃべってる当人も判断としないものでしたが、証人同志の圧倒的な理解力と包容力によって(目は上下左右に激しく回転し、ミケンのシワはますますこくなり、首は前に飛び出して……、明らかに苦闘の様子が見て取れるものでしたが)、何とか進行しました。

反日思想に関連しては、「反日思想は、日本人総体を敵にまわす思想である。第3世界の革命に依拠しようとするものである。また他の運動を軽視し、自分達(武装闘争)のみが闘う者であるかのように考えていると批判する人々がいますが、その点はどうだったのでしょうか」と聞いた(「あいつ汚いなあ、自分が批判に反論できなかったことを将司君に言ってもらおうとしているのか」と思う人もいるかもしれません、まあ、そういうことです。ハハハ、これは「被告人特権」といいます)。

証人同志は考えました。「いわゆる三菱闘争で死傷者を出してしまったことやその後の居直りの声明文がそうした批判の根拠としてあると思います。私達は、加害者だけれども闘っていく中で自分達を革命主体に鍛え上げていくんだということを“腹腹時計”にも書いていますし、日本人総体を敵にするということは一度もいったことはありません」

「第3世界の人々が闘って、日帝を打倒してほしいとか、そうすべきという主張は、一度もしたことはないし、~第3世界主義という立場に私達が立っていたら、間組の闘い(キソダニ・テメンゴール作戦)のような連帶闘争というのは、ありえなかつたわけです」

「他の運動との関係では、一人が公然・非公然両方はやれないわけですから、そうした運動を評価しつつ、私達は私達のそやつて(武闘に)設定して、役割分担として担当する」

また証言の中でくり返し、「大衆とか人民と

いう言い方をして、一人一人の人間にに対して、一人一人の人間がかけないのない命を持っていることを見るよりも、マスとして見てしまったのじやないか、また加害者責任を強調するあまりに、本来加害者でもあり被害者でもある人々という見方ができなかつたことが、三菱声明文の誤りを生んでしまったことを強調していました。

さらに直接尋問の中で私は、これからいっしょに考えていきたいこととして、自分自身がこの間考えている「日帝本国人としての自己否定」を客観的に他を糾弾するものにしてしまったこと」や「現実を直視して誤りを率直に認め、そこから変革していく勇気」というようなことについて話しました。

ダッカハイジャック闘争と超法規的釈放の中では彼から、私達の出獄後、長い間東拘当局による情報制限で、日本赤軍に関する情報をいっさい知ることができなかつたこと、「浴田さん達が今どうしているのか」ということが分からぬ。つまり、日本赤軍との関係も分からぬわけですね。何を考えているのかとも分からぬ。そういう中で、私達が総括をやろうとするとき、自分達が総括したそのままを公表したり、外部に話したりということがはたしてできるのか、~私達が率直に考えたり総括したことを公表することが、出獄した同志達の闘いとか、あるいは生き方の足をひっぱるんじやないか、~當時としてはやはりそこら辺まで考えざるをえないから、総括といつても本音を総括できないと言いますかね、~公表できることは建て前のことしかできないということは、あつたと思うのですね」

浴田「私達自身が何を考え、どうしようとしているのか(難しいとか難しくないとか含めて、いろいろあった中で)、もっとまめに、ていねいに同志達に伝わるように方法はあつたはずだと思うし、今考えたらそういう努力が足りなかつたなあと反省しています。私達を見えないものにさせていたことが同志達を縛っていたことをとらえ返しています」

最後に私は、「8人8様の反日思想」と言わながらやって来て、今、立場や環境の違う中で総括の重点や立場・方法は違つていて

も、私達は同じ総括をしてきたし、皆が同じ初心を今も守り続けている、同じ革命をやっているという確信を強くしている」というようなことを言い、同志は「獄中も対立的になつたことはあったけど、違いは認めつつ、それを広げたり固定的に見るのはなく、結びつけるところで結びつけようということでやってきた。～支援の人々の力も大きかったが、基本的には私達の個々人が自分達の主体的責任において闘いを始めるという出発が生きているから、これまでやってこれたのじゃあなないか。～浴田さんが強制送還されて、それは殘念なことだけど、浴田さんの考え方方が分かって、出獄した同志達ともそういう意味では確認できたなという意味で、私は良かったなと思っているのです」と言ってくれた（ヤッタゼ！！）

私の質問をフォローする形で内田先生に出國した同志達への今の想いを聞かれて、「どこかで生きていてほしい。彼女達がどこかで生きていてくれることが、救いです。日本赤軍に参加しようが、あるいは全く別の生き方をしようが。大事なことは（出国して）そこで十分にやりとげられた総括に基づいてしっかりと生きていくってもらいたい」と。

10日後半と24日前半は、藤田先生から大地の牙との出会いと将司・浴田連絡会議の内容を順をおって事実検証し、28日後半から次回へは、川村先生が3者会談と東アジア反日武装戦線の総括的な内容をつめていきます。

藤田先生のところでは、1回1回の連絡会議の内容まで掘り起こしていくのですが、ここに詳しく書くと「10年の恋も冷め、20年の幻想も破れ」ことになりそうなので、省略（ナニ？ ヒキョーだって？ いいのだ「レポーター特権」と言います）。

ぜひ知りたい方は「公開裁判」にご期待下さい。ウン、いつからか自己の利益のために非公開裁判に便乗してゐるなあ……。ケシカラシナア）。

証人同志は、証言の中で、和君のこと（何と彼らは1968年からの知り合いだったので。最近までそれを知らなかつた私は、何だったのでしようか……）を話してくれています。

紙数がないのでそれについてはまた報告することになります。

大道寺同志への証人尋問はあと2回です。そのあと（たぶん7/27）公開法廷で一連の証人尋問の内容が「公開」されることになるでしょう。

閉廷のあと裁判官が「あと2回ですね」と言うと、証人は「エーッ、あと2回もオ」と言い、被告人は「2回だけ」と言い……（明らかに「利害」が対立しているかのように見えますが）……一人で全方向からの質問に答える立場と、口をあんぐりあけてホワーッと同志をながめているだけという立場のちがいでどうか……。大切に、大切に次のステップをいっしょに準備します。

24日、証人は10日にかかえていたヘルペスを駆逐し、今まで一番元気そうだったことを付け加えています。

5月20日、東アジア反日武装戦線の家族会は、1年ぶりに会同し、「元気の基」を分け合つたそうです。母と吉村同志とTとがつれだつて面会に来てくれました（2年生に進級したTは、学校をサボってきたのではありません。テスト中なので早く終わって「おばあちゃんのために大急ぎで来た」のです。誤解のないように）。「裁判で同志達に会うからオシャレな服を着ていきたいのよ」と言うと、「まあ、そねえな余裕があるそやら！」と大笑いされてしまいました。

「300たたき」だって、それなりに「効果」（相手をだます）はあるらしいのです。同志とのデートを「ここ1着」で決めずに、いつ決めるというのでしょうか。

楽しく、元気に、根性入れてやっています。

きびしいですが、だからこそ闘いがいもある時代です。

ガンバリましょう、共に！ お元気で！

ゆき子



叛逆の Red Pepper

No 1. 3

by ワッタン

最近、私事で頭を悩ませることがたて続けに起きて非常に困っている。まあそんなことは、世の中の大きな情勢から見たらどうってことはないか！なんてトボケタことを言うつもりは毛頭ない。だからといって自己チュウと言うわけでもない。なんだか、頭を悩ませすぎて初っぱなから変な能書をたれてしまったけどこれだけは言わせてもらう。人間は自分で間違ったことをしたと思ったら事実を認めて普通、謝るものだ。ちなみに俺もしょっちゅうヘマをやらかしてばかりいて、その度にアッチコッチに詫をいっている。そのためか最近では知人から、「君は、よく『スマセン』を挨拶代りに使っているな」などと言われてからかわれていたりもする。しかしながら、ごく希に自分の過ちに対して平氣で聞き直る人間もいる。それが他人のプライバシーを傷つけることであればなおのこと許せない。こういった人間の屁理屈を聞いていると、こちらも本当に疲れてくる。これが俺の悩みのひとつである。

人には、良い事と悪い事、の概念にそれぞれある程度の違いがあるって当然なのだが、その差が余りにも開きがありすぎると、日常生活においてもいろいろと問題が生じてくる。例えば、他人の足を踏みつけてもその行為自体を悪いことだと思わない概念を持った人は、そのことについて謝るどころか、平然と聞き直し、第三者から「それは、いけないことだから謝れ」と忠告されても、自分の中では悪いことだと思っていないが故に、その行為自体までも、自分はやっていないなどとシラを切る場合もありうる。俺は、モラリストのつもりはないから、たいていの人間の個性差はそれが個人のレベルで収まる失敗であるならば許容できるとは思っているが、それが他人を、特に社会的立場の不利な人を泣かせるようなことは俺の感情として許せないし、別の意味で社会的立場の不利な人たちを救援しようとしている。<我々>俺たちの立場性からみても許せないことだ。そういう人に人権擁護とか差別反対など口にして欲しくはない。

そしてもうひとつの悩みは、俺たちの人との付き合い方だ。俺は個人レベルの人付き合いをとやかく言う立場じゃないが平たく言って「ものには限度がある」って事だ。例えばたまたま居酒屋で隣の席に座ってた人が、あるいは職場のクライアントが思想的に別の立場だとしても、それは個人レベルの自覚

と責任で付き合えば納まる話だ。だがしかし、運動(救援)に関しては最低限の共通する問題点の一致が(領置品規制や死刑制度反対)あればにせよ、やはり事前に相手の政治的な参加意図などを双方で確認しなければ、関係は成り立つものではないだろう。單にヤクザ的繩張り意識の感覚で、岩の隙間に一滴の水が浸透するかのごとき勘違いも甚だしいのだが、ナアナアで関係が築けるかと思うのもとんでもない間違いだ。

5月29日のロフト・30日の集会会場にもこういった思想・価値観の異なる、連中がフラッと来ても、居酒屋に金を払って一般客として酒を飲みに来るぶんにはいっこうにお構い無しだが、それ以外の付き合いは、まず彼ら自身の歴史を総点検してそれに対する明確な自己批判が伴わなくては実現不可能であろう。それなくして、ノコノコ姿を表わしてあまつさえ自己紹介さえしかねない奴らには、失礼ながら「顔洗って」ならぬ『足洗って出直して来い』と言いたい。

まあ俺(自分で言うのも何だけど)たちは大人だから人前での殴り合いの喧嘩なんじゃないが、20代の若い衆が来てたら一悶着あったかも知れないなあ。まあそれはそれで面白かったかも知れねえけど。

まあ、次回ロフトプラスワンでやる機会があったら、今回以上に盛り上げたいよね(貧乏学生だってちゃんと金払えよ！)。

それと個人的にひとこと言いたいけどロフトで俺と面と向かったときに、「君、今何やってんの」とか聞いたよな。この際はっきり言っとくけど『俺は、あんたたちの敵だよ』一水会の鈴木邦男さんよう。

註・このページの『叛逆の～』は、時代に対するものであって、一集団や個人に対するような狭い意味の叛逆ではない。



レバノン派遣報告 No.4 Hsi

レバノンでJRA 5名の救援をしてくれている“岡本公三とその友人を救援する会”的メンバーについて少し書きます。まずみんな若い！ 明るい！ 全員に会ったわけではないけど、20代半ばくらいが中心で元気に走り回っています。別に若いから良いと言いたいのではなくて、つい日本と比べてしまう……。こんなに大勢の若い人達が政治や人権に興味を持って、生活に密着させて対応していることに驚きと、尊敬の気持ちを持ったのです。彼らの行動は積極的で、えーっ！ そんな事通用するの？ と思うようなこともパンパン気後れせずにやっているように見えます。(勿論わからない事が多すぎるのはあります)

レバノン救援会招請の準備段階のころ、日本の救援会は暗い！ こんなではレバノン人に太刀打ちできないのではなかろうかと、大きな不安を抱いていました。あちらは、生活の何でもない会話の中にも、ジョークや茶目っ気がたっぷりあります。洋画なんか見ると、会話の中で皆さんも感じることありませんか？ レバノンで彼らと話していると、相手のことを気遣う気持ちからそうなるんだ、と思える事が多くありました。オーバーな表現をしないのは日本人の性質で、それが良いとされる部分もありますが、なんだか私には、自分も含めて不器用で、ちょっと寂しく感じました。

今回招請準備中に、在レバノン・日本大使館からレバノン救援会に対して、JRAの救援をするな、というような記者会見など、圧力がかかってきました。レバノン救援会の彼らは5・30集会に日本に来て参加することが出来ませんでしたが、私達も彼らも諦めてはいません。何らかのかたちで次回に持ち越ししたいと考えています。

会計報告

(99年6月2日現在 4/15~)

収入

カンパ	¥ 14. 250
購読料	¥ 12. 000
会費	¥ 39. 000
ザ・パス売上	¥ 25. 480
計	¥ 90. 730

支出

通信費	¥ 17. 036
送料・切手	¥ 55. 920
レバノン差入費用	¥ 22. 160
雑費	¥ 15. 000
計	¥ 111. 016

私の希望では、お金と時間に余裕があれば、日本からツアーを組んで実際にあちらの情況を肌で感じて、レバノンの集会に参加するのもおもしろそうです。

先月、獄中にある足立正生の60歳の誕生日にあわせて、赤いちゃんちゃんこを送りました。吉村さんの手作り！ ちゃんと帽子つきです。結膜炎にかかって両目とも腫れあがった瞼のすき間から覗きながら縫い上げてくれました。でも、売り物顔負けの出来！ そんな特技があったなんて。父は喜んで獄中で自慢して歩いたそうですが、色が色だけにギョッとされて看守達に理解してもらうのが大変だったそうです。毎回獄中メンバーの誕生日になると、レバノン救援会の彼らは、ラジオ局に日本語の歌謡曲テープを持ち込み、放送してもらい、獄中もラジオは聞けるので、みんな楽しみにしています。

長々と派遣報告を書いてきましたが、今回で終わりにします。と言いたいのですが、又近いうちに行く予定です。次回は、レバノンで開催された5・30集会の報告や、今皆さんにお願いしている署名運動の経過をお伝えしたいと思います。レバノンでは、署名運動はまだ馴染みがあまりなく、そういう平和的運動はとても効果があります。出来るだけ多くの人に書いていただきたいのです。皆さん周りの方にも声をかけ、御協力お願いします！

最後になりましたが、レバノンルミエ刑務所獄中から、いろいろな形での救援、協力有難う！

獄中にあって、自分たちが何もできないこと申し訳ない。皆さんへくれぐれもよろしく！ と言っていました。

皆さんこれからも、御協力お願いします！

繰越金	¥ 226. 015
収入	¥ 90. 730
支出	¥ 111. 016
現在所持金	¥ 205. 729
借入金	¥ -2. 240. 000

必要緊急カンパ（レバノン弁護士費用）
¥ -3. 000. 000

今、会は大変な財政難に陥っています。
皆さん、カンパの御協力お願いいたします！

◎公判予定

浴田由紀子さん

6 / 15, 7 / 7, 7 / 27

西川純さん

6 / 16

安田弁護士

6 / 9, 7 / 1, 7 / 2, 7 / 27,
7 / 28, 8 / 25, 8 / 26, 9 / 20,
9 / 21

◎編集後記

この度の、5. 30, 29の集会などの準備をやつてみて感じましたが、諸姉兄様方のご助力、ご支援を得て、そこから多くの学ぶべきところがありました。私たちはこれまでにも、帰國者の裁判を考える会では何度も集会らしきものを開いてきましたが、どれも「手前味噌」的なものになっていました。しかし今回、より協議を重ね実務的な部分に力を注いで形作っていくという行程を経てようやく自分たちに何が足りないのか、どうすればそれを克服できるのかが具体的に解かってきたと思います。それでも結果として、確かに参加者が少なかったという事実はありました。これもレバノン側の外的要因というより、やはり情宣なども含めて自分たちの力量不足であったことは否めません。この教訓を糧に今後、我々は秋頃を目指して引き続きレバノン救援団招請を行っていく所存です。そのときこそは、しっかりした集会を開催したいと思っています。

(一会员・ワッタン)

帰国者の裁判を考える会

〒105-0004

東京都港区新橋 2-8-6 石田ビル 4 F

救援連絡センター気付

TFI 03 (3591) 1301

<http://www3.tky3web.net/~sper/frame.html>

E-mail: speri@tky2.3web.ne.jp

郵便振替 00120-2-398834

加入者名「慢園の裁判を考る会」

年11回刊 定価200円 年間3000円

The Supporting Association for Trials of the Returnees(JRA concerned)

ウーン。左の文章は一体何を主張したいのだろうか。29,30日の集会の主催はウナディコムで、秋に集会をやるのかどうかは、現時点（6／8）でウナディコム内部では決定していません。また、今号は30日の集会報告を掲載する余裕がなくなってしまった。代わりに新聞記事でお許し下さい。上が産経（5／31夕刊）、下がサンスポ（5／31朝）。（K）

件の記念集会を開き、メンバーの日本引き渡しに反対する声明を発表した。

岡本公三受刑者ら
引き渡し反対声明
パレスチナ人集会
【カイロ31日「共同」偽
旅券使用などの罪でレバ
ノンで服役中の岡本公三受
刑者の日本赤軍メンバー五
人を支援するパレスチナ人
らが三十日、ペルルートで
一九七二（昭和四十七）年
のイスラエル・ロッド（現
ベネズエラ）空港に到着
治に命認定などをレバノン
政府に求めた。集会では吉田
援者方に二十世紀に向け
たパレスチナ解放運動への
連帯を呼び掛けた五人のメ
ッセージも紹介された。
乱射事件は七二年の五月
三十日に発生。岡本受刑者
らが銃を乱射し二十六人が
死亡した。

赤軍支援の集会 偽造旅券使用などの罪で
レバノンで服役中の岡本公一
三受刑者(五)から日本赤軍メソバ
ンバ15人を支援する集会が30日、東京で開かれ約500人
が参加、現地で服役しているメンバーからメッセージ
シが寄せられた。差出人は「日本赤軍レバノン獄中者
一同」となっている。

赤軍支援の集会

私たちの立場

- (1) 日本赤軍の思想と実践から区別された、自立的地点に立脚している。
 - (2) 司法権力の攻撃に限らず、少数・異端の者を精神的・物理的に排除しようという方向に働く現代日本の社会状況とはあらゆる場面で対決し、これを変革する努力する。